

# 文化資源としてのミュージアム

資料保存・展示公開の

リ・バランスを考える

コーディネーター

山内 利秋

(九州保健福祉大学)

はじめに



大規模災害が  
各地で多発

インバウンド観  
光など需要増

2012年：九州北部豪雨 求菩提資料館(福岡県豊前市)  
が浸水被害

2016年：熊本地震 熊本県・大分県を中心に各地の  
館・文化財が被害

2017年：九州北部豪雨 甘木歴史資料館(福岡県朝倉  
市)、豆田町重伝建地区・廣瀬資料館(大分県日田市)、  
小鹿田焼の里(同市重文景観)・小鹿田焼陶芸館)が浸  
水被害や土砂崩れで休止

2018年：西日本豪雨 九州各所の文化財被害

阿蘇・霧島など、各地で活発な火山活動

⇒熊本地震と阿蘇山の火山活動

- ・阿蘇火山博物館(熊本県阿蘇市)

霧島新燃岳・硫黄山などの火山活動

- ・えびのエコミュージアムセンター(宮崎県えびの市)

# 南海トラフ巨大地震にむけて

- 各県立博物館・美術館を対象とした九州山口地方の広域相互連携の仕組みの構築(九州国立博物館「みんなで守る文化財、みんなをまもるミュージアム」事業など)。
- 各県でも博物館協議会等での対策がおこなわれつつある。被災時の連携協力体制の確立(大学や民間専門家との協力、温度差はある)。

大規模災害はミュージアムの運営にも大きくにも影響。

- 施設建物の耐震診断・耐震化についての検討。
- 施設設備の免震化や資料の固定化など展示技術での対応⇒阪神淡路大震災・東日本大震災を経て一般化・浸透、技術の共有化。
- 公共機関におけるBCP(事業継続計画)策定の動向。
- 災害時におけるミュージアムの「包摂」への視点(熊本地震・西日本豪雨災害など)。

# 求められる「稼げる」姿

「活用」への対応。

- インバウンド観光が主眼。
- それ以外もあり得るものの..。

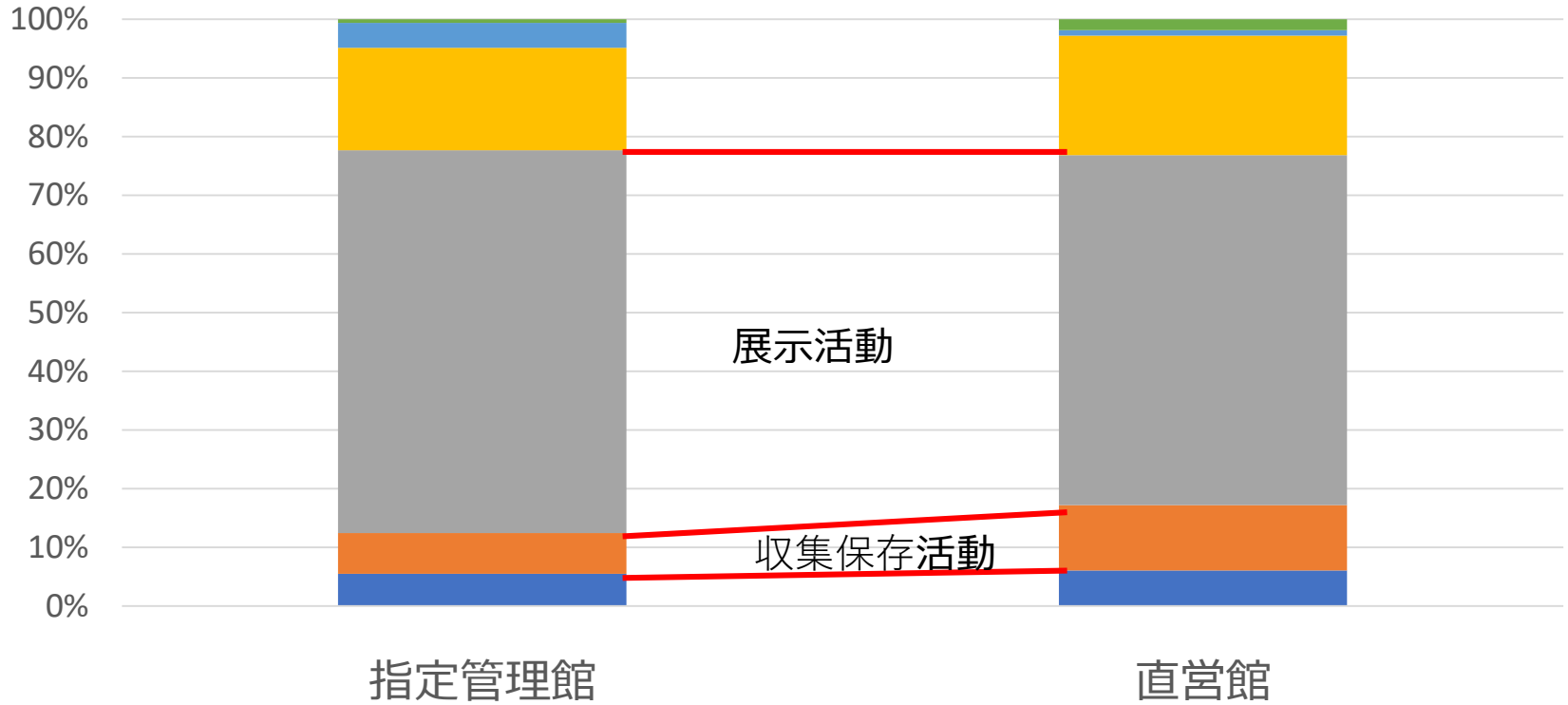
## 運営主体の変化

- 指定管理館の増加(公立施設数に占める割合、約3割  
<H27年度『社会教育調査』>)・首長部局への移管。
- もはや時流？

# 活用への対応

- 「公開ニーズの多様化」 ・ 「展示設備等の技術的な進歩」 など⇒公開期間の延長を認める動向。
- **2018年** 「国宝・重要文化財の公開に関する取扱要項改訂」 では対象・材質等によって基準が明確化(対象による棄損可能性の高・低明確化)。

# 最も重視する活動



- 調査研究活動
- 収集保存活動
- 展示活動
- 教育普及活動
- レクリエーション
- 重視する活動無回答



# 技術改良と新たな技術課題

- 技術改良によって生まれた展示技術にも、新たな問題点。
- 文化財保存修復学会
  - 例)2016年大会シンポジウム「展示技術と保存技術」⇒次ページ。

- エアタイトケース気密化⇒展示中の空気交換の清浄化が進まない。
- LEDスポットライトの照度分布の偏り⇒照度差が顕著⇒スポットライトを追加しがち、基準照度を越える。
- 展示頻度が高いなど、一定の資料にのみ負担がかかる⇒これら一定の資料の緊急的保存処置が優先され、修理が必要な他の資料の処置がまわってこない。

など。

キーワード：リ・バランス

キーワード：リ・バランス

- 証券用語で「相場変動などで変化した投資配分比率を見直し、値上がりした資産・銘柄を売り、値下がりをした資産・銘柄を買い増す」事。
- ここでは、本来取り決めた状況に戻す意味合いが強い。

- 様々な条件の変化に応じて展示と保存のバランスも変化しつつある。
- ここでは、特にミュージアムを運営する立場にある方々から、各館の事例をご紹介頂くとともに、課題を議論してみたいと考える。

# パネリストの発表について

- 安田 恭子氏(佐世保市博物館島瀬美術センター)
  - 教委から首長部局へと運営が変化した中で資料の保存・展示。
- 米田 耕司氏(長崎県美術館)
  - 観光振興など新しい状況へのミュージアムの対応。
- 池辺 伸一郎氏(阿蘇火山博物館)
  - 大規模災害後の展示(伝える事)のあり方。